

L2日本語における非顕在的な要素の習得研究

山 田 一 美

I はじめに

日本語の特徴として、文の要素を省略できることが挙げられる。(ア)の文は、従属節の主語が省略されており、従属節の主語と主節の主語「誰か」は同一人物かもしれないし、そうでないかもしれない。(イ)の文は、従属節に「彼」という音をもつ(顕在的な)主語があり、「彼」と「誰か」は別の人物だと解釈される。しかし、日本語の(イ)の文に対応する英語の(ウ)の文は、(ア)の文と同様に解釈され、「he」および「someone」は同じ人物、あるいは別の人物であり得る。なぜ、省略を含む(ア)の文の方が、省略されていない(イ)の文よりも従属節の主語については解釈が1つ多いのだろうか。

(ア) 誰かが映画を観たと言っていました。

(イ) 誰かが彼が映画を観たと言っていました。

(ウ) Someone said that he saw a movie.

また、(エ)および(オ)における話者Bの発話では、少なくとも2つの解釈が可能である。鈴木さんが洗ったのは、田中さんの車かもしれないし、鈴木さんの車かもしれない。また、鈴木さんが一番だと思っているのは、田中さんの車かもしれないし、鈴木さんの車かもしれない。

(エ) 話者A：田中さんは自分の車を洗った。

話者B：鈴木さんも洗った。

(オ) 話者A：田中さんは自分の車が一番だと思っている。

話者B：鈴木さんも一番だと思っている。

日本語学習者は、このような音をもたない(非顕在的な)要素をどのように習得するの

だろうか。習得の早い段階から、日本語母語話者と同じように解釈ができるのだろうか。あるいは、習熟度が進んでも、非顕在的な要素の解釈に困難を抱えているのであろうか。本稿では、まず日本語の非顕在的な要素を代名詞としてとらえ、日本語学習者の中間言語を普遍文法原理の枠組みで検証した Kanno (1997)、および、非顕在的な要素を項削除ととらえ、第二言語 (L2) 素性の習得モデルを用いて中間言語を検証した Yamada and Miyamoto (2017) を比較し、言語理論の発展による中間言語分析の変化についてみていきたい。さらに、予備実験で得られた項削除の解釈に関する L2 学習者のデータ結果が、現状では十分に説明できないことを報告し、今後の研究の必要性を指摘する。

II Kanno (1997)

顕在的代名詞の制約 (Overt Pronoun Constraint = OPC) は Montalbetti (1984) によって提案された普遍文法 (Universal Grammar = UG) 原理の1つである。

- (1) OPC : Overt pronouns cannot link to formal variables where the alternation overt/empty obtains. (Montalbetti, 1984: 94)

OPC によれば、ある文脈において、顕在的代名詞と非顕在的代名詞 (*pro*) が相補分布の関係にあるとき、顕在的代名詞は変項によって束縛されない。つまり、ある構造の中で、音をもつ代名詞と音をもたない代名詞の両方が出現できる位置において、音をもたない代名詞だけが変項を先行詞とすることが可能である、という制約である。よって、顕在的代名詞は変数を先行詞とすることができない。(2) は日本語において OPC が適用される文の例である。

- (2) a. 誰か_iが 明日 ϕ _{i,j} 動物園へ行くと言っていましたよ。
 b. 誰か_iが 明日 彼_{*i,j}が 動物園へ行くと言っていましたよ。

(2a) の従属節中の空主語は、主節の主語である「誰か」を先行詞とすることが可能であり、空主語は「誰か」を指示することができる。(2b) では、OPC により、従属節中の顕在的代名詞「彼」が主節の主語「誰か」を先行詞とすることが許されない。よって、「彼」は、文脈中の他の人物を指示することになる。一方、英語では、(2) のような文において空項が容認されないため、(3) の文になり、顕在的代名詞「he」は someone あるいは文脈の中の人物を指示する。

- (3) Someone_i says that he_{i,j} will go to the zoo tomorrow.

Montalbettiによる OPC の定義 (1) を、Kanno (1997) は広義に解釈し、(4) のように定義している。

- (4) OPC : In languages that permit null arguments, an overt pronominal must not have a quantified antecedent. (Kanno, 1997: 267)

上記の定義は、もしある言語が空項を許容する場合、顕在的代名詞が束縛変項とならないことを示している。この定義を出発点として、Kanno は日本語学習者が OPC にアクセス可能かどうかを検証した。調査対象は、ハワイ大学において日本語コース（第4セメスター）に登録した英語母語話者の28名の学生（L2日本語学習者）であり、彼らには日本での滞在経験や日本語母語話者と話をした経験がなかった¹⁾。さらに、統制群として20名の日本語母語話者が調査に参加した。調査には筆記の質問紙が使用された。Kanno が調査に使用した文タイプは (5) のとおりである。

- (5) a. 主節主語 = 数量的名詞句、従属節主語 = 非顕在的代名詞
だれが φ 車を買ったと言ったの？
- b. 主節主語 = 数量的名詞句、従属節主語 = 顕在的代名詞
だれが 彼が 車を買ったと言ったの？
- c. 主節主語 = 指示的名詞句、従属節主語 = 非顕在的代名詞
田中が φ 会社で 一番だと 言っている。
- d. 主節主語 = 指示的名詞句、従属節主語 = 顕在的代名詞
田中が 彼が 会社で 一番だと 言っている。

調査では、被験者は上記のような実験文に続いて、(6) のような質問を提示された。

- (6) 実験文：田中が 彼が 会社で 一番だと 言っている。
質問 : Who do you suppose is the best in the company?

1) 第5セメスターをもって、初級レベルの日本語文法を学習し終えるコース内容となっている (Kanno, 1997: 269)。

被験者は3つの解答の中から1つを選ぶよう指示された：(ア) 田中と同じ（つまり、主節の主語）、(イ) 他の人物、(ウ) 田中と他の人物の両方が可能。調査結果は表1のとおりであった。全体の結果として、統制群である日本語母語話者は、「彼」の先行詞として指示的名詞句を47.0% 容認したが、数量的名詞句の容認率は2.0% であった。よって、得られた結果は、日本語母語話者が OPC にしたがって当該の文を解釈していることを示している。日本語学習者グループでは統制群と同じような結果が得られ、「彼」の先行詞として指示的名詞句を42.0% 容認したが、数量的名詞句の容認率は13.0% であった。

文タイプ	L2 学習者 (n=28)		日本語母語話者 (n=20)	
	(ア) (ウ)	(イ) のみ	(ア) (ウ)	(イ) のみ
a. 数量的名詞句…φ	78.5%	21.5%	83.0%	17.0%
b. 数量的名詞句…彼	13.0%	87.0%	2.0%	98.0%
c. 指示的名詞句…φ	81.5%	18.5%	100%	0%
d. 指示的名詞句…彼	42.0%	58.0%	47.0%	53.0%

表1：非顕在的代名詞 (*pro*) および「彼」の容認率

得られた日本語学習者の解釈は、これまでの彼らの経験（日本での滞在経験や日本語母語話者とのやりとりの経験が無いこと）から推測できるものではなく、また、英語では空代名詞が許容されないため母語から影響を受けているという可能性も考えられない。さらに、彼らの日本語レベルは初級であり、日本語に触れてきた時間が短いにも関わらず、日本語母語話者と同じような解釈をしている結果が得られたことから、Kanno は、L2学習者が OPC にしたがっており、UG にアクセスが可能であることを主張した²⁾。

Kanno (1997) は、日本語の非顕在的な項を *pro* としてとらえ、L2学習者の UG へのアクセスの可能性について、その議論に、それまであまり取り上げられなかった日本語習得という観点から一石を投じた研究であり、非常に重要な成果を上げたことは言うまでもない。しかしながら、近年、日本語の非顕在的な項は、代名詞一般とは異なる性質をもつことが明らかにされ、その統語ステータスが *pro* ではなく項削除であることが主張されている。(Oku, 1998; Saito, 2007他)。この理論的発展がもたらした知見は、非顕在的な項に関する第二言語習得研究における先行研究の分析が、広義の非顕在的な項に関する習得研究の一部のパターンに限定されているにすぎないことを示している。言語習得理論の健全な発展のためには、可能な限り広範囲の経験的事実に裏打ちされた理論的展望が必要である。そしてその新たな言語理論の成果を枠組みとし、さらに高い説明力を得て、学習者の中間

2) Marsden (1998) および Yamada (2005) の調査では、日本語母語話者が顕在的代名詞「彼」が数量的名詞句だけでなく指示的名詞句についても、その先行詞として容認した割合が低かった。Kanno (1997) では、ハワイ在住の日本語母語話者を対象としたため、彼らが英語の影響を受けていたことから、表1の結果が得られた可能性が考えられることが指摘されている。Yamada (2005) は、素性レベルでの中間言語分析に取り組み、分散形態論の枠組みで当該の現象を説明している。

言語の分析を進められれば、第二言語習得のメカニズムのさらなる解明が可能となる。

次節では、従来の *pro* 分析では説明が困難な日本語の非顕在的な要素の解釈および項削除分析について概観する。

Ⅲ 日本語の空項と項削除分析

pro 分析の下では、省略されているようにみえる項の位置には、実は音形をもたない代名詞が存在していると考えられてきた³⁾。しかし、日本語において *pro* であると考えられてきた要素は、一般的な代名詞とは異なる解釈をもつことが Oku (1997) によって主張されている。例えば、(7) では顕在的な項が従属節の主語であるが、もしこの要素が代名詞であるとすれば、(8b) の解釈は予測できない。

- (7) a. メアリーは 自分の 論文が 採用されると 思っている。
 b. ジョンも ϕ 採用されると 思っている。
 (Oku 1998: 305)

- (8) a. ジョンも彼女 (=メアリー) の論文が採用されると思っている。
 (厳密な同一性解釈)
 b. ジョンも自分 (=ジョン) の論文が採用されると思っている。
 (緩やかな同一性解釈)

Oku は、(7b) では「自分の論文」という決定詞句 DP の項が省略されており、それが、論理形式 LF のレベルで省略された位置に挿入されている、と主張している⁴⁾。つまり、項削除分析では、省略された元位置には「自分の論文」が生成されるが、同一名詞句の繰り返しを避けるために省略されていると分析される。さらに Saito (2007) では、この省略は、日本語に一致 agreement が欠如しているため可能であると主張されている。英語には一致が存在するため、(7b) のような省略は起こらず、緩やかな同一性解釈は得られない、ということである⁵⁾。また、日本語では (9b) のように、主語だけではなく目的語も省略されるが、(7b) 同様に、項削除分析の下では、省略された元位置に「自分の手紙」が生成され、それが省略されて、LF で挿入されると分析される。

3) 項とは、動詞などの述語に意味的に選択される要素である (高橋2016: 229)。例えば、「鈴木さんが帰った」という文の動詞「帰る」は意味的に「帰る人」が同一文中に表されることを要求しており、「鈴木さん」は「帰る」によって意味的に「選択」されていることになる。よって、「鈴木さん」は「帰る」という動詞の項である。

4) 論理形式 LF とは意味表示のレベルのことである。

5) Agreement とは機能範疇の一種であり、一致要素のことである、人称、性、数からなり、時制文の主語に主格を付与すると考えられている (安藤・小野1993: 8)。英語では主語と動詞の一致として、I am / you are / he is 等が挙げられる。

- (9) a. ジョンは 自分の 手紙を 捨てた。
 b. メアリーも ϕ 捨てた。
- (10) a. メアリーも彼 (=ジョン) の手紙を捨てた。 (厳密な同一性解釈)
 b. メアリーも自分 (=メアリー) の手紙を捨てた。 (緩やかな同一性解釈)
 (Otani and Whitman 1991: 346-347)

緩やかな同一性解釈は、*pro* 分析では説明が困難な空項の解釈の1つであるが、高橋 (2016) は、さらに以下のような解釈を挙げている。

- (11) a. ハリーは (一晩に) 3冊の本を読めた。
 b. ロンは 読めなかった。 (高橋2016: 248)
- (12) a. ハリーとジニーはお互いを尊敬している。
 b. ロンとハーマイオニーは お互いを 軽蔑している。 (高橋2016: 246)

上記 (11b) では、目的語の数量詞「3冊の本」が、(12b) では、相互代名詞「お互い」が省略されており、それぞれ、「ロンはハリーが読んだ3冊以外の3冊の本を読めなかった」、「ロンとハーマイオニーはお互いを軽蔑している」という解釈 (相互読み) が可能である。しかし、(11b) の目的語位置に「それら」、(12b) の目的語位置に「彼ら」という顕在的代名詞を挿入しても、そのような解釈は得られない。つまり、上記のような数量詞や相互読みの解釈は、緩やかな同一性解釈と同様、*pro* 分析では説明ができないのである。しかし、項削除分析では、元位置に、「3冊の本を」、「お互いを」が生成され、同一名詞句の繰り返しを避けるために省略されているという分析が可能である。

以上のように、項削除分析のもとでは、日本語の空項の解釈に関してより広範囲に説明が可能となる。よって、日本語の空項を *pro* ととらえ、OPC に関して日本語学習者の L2 文法を検証した Kanno (1997) で得られた調査結果と、日本語の空項を項削除であるという枠組みで検証した調査結果が異なることは、十分に考えられる。つまり、Kanno (1997) における、英語を母語とする初級レベルの日本語学習者の L2 日本語文法が日本語母語話者と同様である、という結論とは全く異なる結論が得られる可能性がある。次節では、上級レベルの日本語学習者であっても、母語である非 *pro* 脱落言語 (例：英語、フランス語等) の影響 (負の転移) を受け、日本語母語話者とは異なる振る舞いを示した Yamada and Miyamoto (2017) を概観する。

IV Yamada and Miyamoto (2017)

日本語の空項を項削除ととらえ、日本語学習者の空項の習得について調査した Yamada and Miyamoto (2017) (以下 Y&M) では、緩やかな同一性解釈に焦点が当てられた。Y&M は、母語が *pro* 脱落言語 (スペイン語) である学習者と非 *pro* 脱落言語 (英語、フランス語、ドイツ語、オランダ語) である学習者の2つのグループを対象に実験を実施したが、Kanno (1997) の調査結果との比較のため、本稿では、非 *pro* 脱落言語の母語話者グループ (n=15) の調査結果について述べる。

前節でふれられたとおり、英語のような一致をもつ言語では項省略は起こらない。よって、Y&M の非 *pro* 脱落言語を母語とする日本語学習者は (8b) および (10b) のような緩やかな同一性解釈を習得する際、母語の知識に頼ることができず、新たに、その解釈を習得しなければならない。また、一致という観点からは、日本語は一致要素がない言語であるため、英語母語話者が緩やかな同一性解釈を習得するには、彼らの L2 日本語文法において、英語の一致要素を喪失する必要があると考えられる。Y&M は Ishino (2012) の feature transfer and feature learning model (FTFL) 素性転移・素性学習モデルという素性を基盤とした L2 習得モデルを取り入れ、日本語学習者の緩やかな同一性解釈の習得過程について予測をした⁶⁾。FTFL によれば、母語の素性転移は初中級レベルで起こる。その素性は上級レベルまで中間言語に留まり、L2 文法に影響を与える。そして、上級レベルに達すると L2 素性との競合が生じる。反対に、母語からの素性転移が起こらない場合、上級レベルでの L2 素性の習得は促進される。そして、もっとも重要なことは、FTFL では L1 素性の喪失を不可能としている。FTFL をふまえ、Y&M は非 *pro* 脱落言語を母語とする日本語学習者について、以下のような仮説を立てた。

仮説：非 *pro* 脱落言語を母語とする日本語学習者については、彼らの L2 文法で空項が許容される場合、L1 の一致素性が喪失不可能であるため、彼らは緩やかな同一性解釈を容認しない。反対に、厳密な同一性解釈については、D 素性挿入の可能性により、容認する⁷⁾。

Y&M の調査は、2つのタスクを用いて実施された。スクリーニングタスクおよび写真を用いた真偽値判断タスクである。スクリーニングタスクは L2 日本語文法で空項 (空主語、

6) 素性とは、文法特性を記述するために考えられたものであり、例えば、可算名詞と不可算名詞の違いは [±count] という素性で記述される (Radford 2004: 452)。

7) 非 *pro* 脱落言語を母語とする日本語学習者が L2 文法に空項を許容するためには、*pro* 脱落パラメータの値をそのように設定する必要があると考えられる。Robert (2007) では、当該パラメータについて、T (ence) が D 素性をもつか否かという観点から説明がなされており、D 素性の T への挿入によって空項が許容されることになる。FTFL では L1 の素性転移が起こらない場合、新しい素性 (つまり D 素性) の習得が促進されることになるため、日本語学習者による D 素性の習得は可能であることが予測される。

空目的語)を許容する学習者を判別するためのものであり、空項を許容した学習者のみ、その真偽値判断タスクの結果を考察に含めることとした(真偽値判断タスクは、学習者の空項の解釈を検証するためのタスクであったため)。学習者の結果は表2および表3のとおりである。緩やかな同一性解釈については、日本語母語話者グループの容認率が95.5%(空主語)、100%(空目的語)であったのに対し、日本語学習者グループは約20~25%(空主語)、約28~30%(空目的語)であった。両グループの容認率については、統計的にも有意差が観察された(空主語、空目的語ともに $p < 0.001$)。よって、非 *pro* 脱落言語を母語とする上級レベルの日本語学習者の結果は、Y&Mの仮説を指示するものであった。

		緩やかな同一性解釈	厳密な同一性解釈
日本語母語話者	(n=11)	95.5%	77.3%
日本語学習者(上級上)	(n=7)	21.5%	85.7%
日本語学習者(上級下)	(n=8)	25.0%	87.5%

表2：非 *pro* 脱落言語の日本語学習者による空主語の容認率

		緩やかな同一性解釈	厳密な同一性解釈
日本語母語話者	(n=11)	100%	77.3%
日本語学習者(上級上)	(n=7)	28.6%	78.6%
日本語学習者(上級下)	(n=8)	31.3%	62.5%

表3：非 *pro* 脱落言語の日本語学習者による空目的語の容認率

Y&Mでは、習得がかなり進んだ段階であっても、日本語学習者が緩やかな同一性解釈について困難を抱えていることが明らかになった。得られた調査結果から、Y&Mでは空項の習得に関して、日本語母語話者の文法と上級日本語学習者のL2文法が異なることが主張されている。Kanno(1997)では、OPC(UG原理)へのアクセス可能性の観点から、日本語学習者のL2文法が質的に日本語母語話者の文法と同様であると結論づけられたが、Y&Mでは異なる結論に至っている。日本語の非顕在的な項が項削除の結果であるという言語理論研究の成果は、より高い説明性をもって、中間言語を分析することを可能にしたのである。

V 予備実験データから

前節でみたように、Y&M(2017)では、英語母語話者の日本語学習者は上級レベルであっても緩やかな同一性解釈ができないことが報告されている。ここで、項削除分析において説明が可能な他の解釈、つまり、数量詞および相互読みの解釈に目を向けてみる。以下に(13)および(14)として再掲する。

- (13) a. ハリーは（一晩に）3冊の本を読めた。
b. ロンは読めなかった。 (高橋2016: 248)
- (14) a. ハリーとジニーはお互いを尊敬している。
b. ロンとハーマイオニーは お互いを 軽蔑している。 (高橋2016: 246)

緩やかな同一性解釈と同様に、上記の2つの解釈も項削除分析のもとで説明が可能であることをふまえ、Ishino (2012) のFTFLに照らし合わせると、非顕在的な項の習得に関しては、以下のような仮説がたてられる。

仮説1：非 *pro* 脱落言語を母語とする日本語学習者

L2日本語文法では、初中級レベルで母語の一致素性が転移し、上級レベルでは競合する素性が日本語には存在しないため、一致素性はL2文法に影響を与え続ける。よって、上級学習者は、揺るやかな同一性解釈と同様に、数量詞や相互代名詞の解釈も容認しない。

仮説2：日本語を母語とする英語学習者

初中級レベルのL2英語文法では母語の影響がみられるため、中級レベルの学習者は、緩やかな同一性解釈と同様に、数量詞や相互代名詞の解釈を容認する。

以下では、上記の仮説をふまえて実施した予備実験結果を報告する。また、その結果から、今後の研究で明確にすべき点を列挙する。

1. 予備実験1（仮説1の検証）

被験者

非 *pro* 脱落言語を母語にもつ学習者12名（英語8名、フランス語2名、ドイツ語1名、オランダ語1名）、および、統制群として日本語母語話者が12名から協力を得られた。学習者グループはイギリスの大学の学部生あるいは大学院生であり（19～26歳、平均21.9歳）、統制群は日本の大学の学部生であった（18～20歳、平均18.8歳）。学習者の日本語学習歴は、1～6年（平均2.9年）、習熟度については、Simple Performance-Oriented Test (SPOT) の結果から、上級上（N1レベル：n=5）および上級下（N2レベル：n=7）の2グループに分けられた。

実験タスクと手順

Yamada and Miyamoto (2017) と同様に、スクリーニングタスクおよび写真を用いた

真偽値判断タスクが使用された。スクリーニングタスクにおいて、L2日本語文法で空項（空主語、空目的語）を許容する学習者を判別し、空項を許容した学習者のみ、その真偽値判断タスクの結果を考察した。実験時間は1時間程度であった。被験者に実験の目的（非顕在的な項が数量詞や相互読みの解釈をもつかどうか）を気づかれないよう、まず、真偽値判断タスク、続いてスクリーニングタスクを実施した。

スクリーニングタスクの実験アイテム数は合計6つであり、空主語を含む文が3つ、空目的語を含む文が3つであった。(15)、(16)にアイテム例を示す。

(15) 空主語文

たろうが赤い服の女の子の人をみたとき、[e] サムのお姉さんだと思った。

正しい・自然 / 誤り・不自然

(16) 空目的語文

たろうがコンピューターを壊してしまいましたが、お父さんが[e]直しました。

正しい・自然 / 誤り・不自然

もし「誤り・不自然」を選択した場合、学習者は直接、文中の該当箇所を訂正するように指示された。また、制限時間は設けなかったが、学習者にはできるだけ早く回答するよう、また一度答えた問題にもどらないように指示した。

真偽値判断タスクの実験アイテム数は計52であり、本稿では、その中で当該の解釈に関するアイテムは合計4つ（数量詞 n=2、相互読み n=2）の解釈について報告する。被験者は、スクリーンに映し出された、動物や人間のフィギュアが会話をしている様子の写真や動画を見て、同時に、それらの会話も聞いた。会話は、学習者および統制群に文脈を十分に理解してもらうため、学習者には英語、統制群には日本語で聞かせた。続いて、文脈を説明する英語の実験文を聞かせ、その内容が文脈を正しく説明しているかどうか判断させた。実際の実験アイテム例は(17)、(18)のとおりである。(20)では写真、(21)では動画（動物のペアがお互いの体を拭いている）を被験者に提示した。

(17) 数量詞の解釈

1.



どっちもおいしそう。

2.



おいしかった。

3.



きれいなケーキ。

4.



おいしかったわ。

実験文：エリックは2個のケーキを食べた。モニカも [e] 食べた。

正しい・誤り

(18) 相互読みの解釈

1.



うさぎ：くまさん、ずぶぬれだよ。早く着替えた方がいいわ。
くま：うさぎさんだって、ずぶぬれだよ。かぜひいちゃうよ。気をつけて。

2.



ミーアキャット：カンガルーさん、ひどい雨だったね。ずぶぬれだよ。
カンガルー：ミーアキャットさんも、ずぶぬれだよ。かわいそうに。

実験文：くまとうさぎはお互いの体を拭いた。ミーアキャットとカンガルーも [e] 拭いた。
正しい・誤り

(19) 緩やかな同一性解釈

1.



車がきたないなあ

2.



きれいになった。

3.



そろそろきれいにしよう。

4.



よし、ピカピカになった。

実験文：くまは自分の車を拭いた。ペンギンも [e] 拭いた。
正しい・誤り

結果と考察

得られた結果を表4に示す。表4の3つの解釈は、項削除分析の下で省略がされている要素の解釈であるため、理論的には同じ容認率になることが予測される。しかし、緩やかな同一性解釈と比較すると、数量詞の解釈で約10%の容認率の異なりが観察されている。この差は、仮説1からは導きだせない結果である。非 *pro* 脱落言語では空項が許容されず、当該の解釈は得られないため、母語の影響からでは説明ができない。緩やかな同一性解釈については、上級レベルであっても習得が困難なことがY&M (2017) で主張されているが、数量詞の解釈についても、本当に習得が困難なのだろうか。

被験者	数量詞の解釈	相互読みの解釈	緩やかな同一性解釈
日本語学習者 上級 (n=12)	38.9%	33.3%	29.2%
日本語母語話者 (n=12)	100%	91.7%	95.8%

表4：非 *pro* 脱落言語を母語とする日本語学習者の空項の容認率

数量詞の解釈と緩やかな同一性解釈に関する異なる容認率の結果から、どちらも項削除の結果、得られる解釈ではあるが、削除の過程で異なる統語操作が関係している可能性がある。

2. 予備実験2（仮説2の検証）

被験者

日本語母語話者の英語学習者7名が実験に参加した（18～19歳、平均18.7歳⁸⁾。彼らは日本の大学の学部生であった。学習者の日本語学習歴は、6～7年（平均6.5年）、習熟度については、Oxford Placement Test (OPT) の結果、中級レベルであった。

実験タスクと手順

予備実験1と同様、スクリーニングタスクおよび真偽値判断タスクを実施した。使用した実験アイテムも予備実験と同様のものではあったが、スクリーニングタスクについては、(20)、(21)のように英語の文を提示した。

(20) 空主語文

When Taro saw a woman in read, he thought [e] was Sam's elder sister.

正しい・自然 / 誤り・不自然

(21) 空目的語文

Although Taro broke a computer, his father fixed [e].

正しい・自然 / 誤り・不自然

真偽値判断タスクでは、学習者の文脈理解を確実にするため、会話文は日本語で聞かせ、実験文は英語で提示した。

結果と考察

得られた結果を表5に示す。英語では空項が許容されないため、L2英語文法で空項を許容し3つの解釈を容認した英語学習者の表5の結果は、中級レベルの段階では明らかに母語の影響がみられることを示している。しかし、表5では日本語母語話者の英語学習者の相互読みの解釈の容認率が、緩やかな同一性解釈および数量詞の解釈と比較すると20%以上低い結果が得られている。つまり、相互読みの解釈については、他の2つの解釈に比べて喪失が早いと言える。この解釈の容認率の差は、仮説2からは導きだせない結果である。予備実験1における、日本語母語話者統群の相互読みの解釈の容認率を振り返ってみる

8) 今後の研究では英語母語話者の統制群を設定することが必要である。

と、表4に示されているとおり、緩やかな同一性解釈および数量詞の解釈と同様（約90～100%の容認率）である。それにも関わらず、なぜ日本語母語話者の英語の習得過程では、相互読みの解釈のみ約60%の容認率なのだろうか。なぜ母語の影響が、容認率に均等に反映されないのだろうか。今後、習熟度が進むにつれて、当該の3つの解釈はどのように変化していくのだろうか。

被験者		数量詞の解釈	相互読みの解釈	緩やかな同一性解釈
英語学習者 中級	(n=7)	100%	64.3%	92.9%

表5：日本語を母語とする英語学習者の空項の容認率

相互読みの解釈と、緩やかな同一性解釈および数量詞の解釈に関して異なる容認率が得られたことから、3つの解釈は項削除の結果、得られる解釈ではあるものの、削除の過程で異なる統語操作が関係している可能性がある。

3. 今後の研究について

予備実験結果をふまえ、非顕在的な項の解釈に関する今後の研究では、以下の1)～5)を明確にする必要があると考えられる。

- 1) 表4、5の結果が、項削除分析から十分に予測できないのはなぜか。
- 2) 数量詞と相互読みの解釈に関し、中間言語ではどの程度、母語の影響がみられるのか。
- 3) 上記2つの解釈の習得（および喪失）に段階はみられるのか。
- 4) 学習者は最終的にそれらの解釈を習得（および喪失）可能か。
- 5) 項削除をふまえた上でのさらなる統語分析から、中間言語における数量詞および相互読みの解釈はどのように説明されるのか。

今後は、実験アイテム、実施方法などの改良を経て、より多くの被験者を対象にした本実験を実施する必要がある。さらに、予備実験に続き、本実験においても双方向の習得（*pro* 脱落言語（英語）⇔日本語）が検証できれば、それぞれの言語の習得および喪失がどのように進むのかをより広く分析でき、大変興味深い考察につながると考えられる。

VI おわりに

本稿では、まず日本語の非顕在的な要素に関する言語理論の発展をふまえ、英語を母語とする日本語学習者の OPC へのアクセス可能性を検証した古典的な研究 Kanno (1997)、および素性ベースの L2 習得モデルを用いて学習者の緩やかな同一性解釈について検証し

た Yamada and Miyamoto (2017) を比較した。この2つの研究では、英語母語話者の日本学習者という同じ被験者を対象としているにも関わらず、中間言語に母語の影響がみられるのか、また、日本語母語話者の言語知識と日本語学習者のL2言語知識は質的に同じであるのかという点で、全く異なる結果が得られた。言語理論の発展に伴い、中間言語が高い説明力をもって説明され、より詳細に分析されることが可能になってきたと言える。続いて、予備実験で得られた、L2学習者による非顕在的な項の数量詞および相互読みの解釈に関するデータ結果を提示し、緩やかな同一性解釈の結果と比較した場合、単純に項削除分析では説明ができないことを指摘した。今後、本実験実施に向けて実験アイテムを整え、新たにデータを収集し、項削除に関するさらなる統語分析に照らし合わせることで、L2学習者の非顕在的な項の解釈について説明が可能になるだろう。

非顕在的な要素の習得については、従来、主にスペイン語、イタリア語、ギリシャ語などの言語を対象とした研究がされており、日本語習得研究は数少ない⁹⁾。日本語を含め、総合的に第二言語習得過程を検証することで、中間言語についての理解がさらに深まり、ヨーロッパ言語の検証からだけでは得られない成果が期待できる。

参考文献

- Hoji, H. (1987). Empty pronominals in Japanese and subject of NP. *Proceedings of NELS, 17*, University of Massachusetts at Amherst, Graduate Linguistics Students Association.
- Ishino, N. (2012). *Feature transfer and feature learning in Universal Grammar: A comparative study of the syntactic mechanism for second language acquisition*. Doctoral dissertation, Kwansai Gakuin University.
- Kanno, K. (1997) The acquisition of null and overt pronominals in Japanese by English speakers. *Second Language Research, 13, 3*: 267-287.
- Kizu, M. and Yamada, K. (2016) The effect of instruction on null subject: A case of L2 Japanese learners. In M. Hirakawa, J. Matthews, K. Otaki, N. Snape, and M. Umeda (Eds.), *Proceedings of PacSLRF 2016*. Paper presented at Japan Second Language Association, Chuo University, Tokyo, 9-11 September (pp. 115-120).
- Kizu, M. and Yamada, K. (2017, August). *L2 Acquisition of 'Agreement' in Speech Act Projections*. Paper presented at British Association for Applied Linguistics, University of Leeds.
- Marsden, H. (1998). *A study of L1 influence in the L2 acquisition of Japanese with respect to a 'poverty of the stimulus' phenomenon*. Unpublished MA dissertation. University of Durham.
- Miyagawa, S. (2017). *Agreement Beyond Phi*, MIT Press.
- Montalbetti, M. M. (1984). *After binding. On the interpretation of pronouns*. Doctoral dissertation, MIT, Cambridge, Mass.

9) 日本語の非顕在的な項に関する習得研究はいまだかなり限られてはいるが、例えば、Kizu & Yamada (2016) では、英語を母語とする日本語学習者の空項の解釈および産出に、教授がどの程度影響するのかについて検証がなされている。また、Kizu & Yamada (2017) では、中国語、韓国語、英語を母語とする日本語学習者の空項の解釈および産出が検証され、Miyagawa (2017) で提案されている Strong Uniformity の言語の類型的分類から中間言語の説明が試みられている。

- Nakayama, M. (1988). Parameters and their initial settings', In T. Matsude, H. Masuda and Y. Takamo (Eds.), *Studies for Yoshiro Kojima.*, Iwasaki Linguistic Circle, Tokyo.
- Oku, S. (1998). LF Copy Analysis of Japanese Null Arguments. *CLS*, 34, 299-314.
- Otani, K. and Whitman, J. (1991). V-Raising and VP-Ellipsis, *Linguistic Inquiry*, 22 (2), 345-358.
- Radford, A. (2004). *Minimalist Syntax: Exploring the Structure of English*, Cambridge University Press.
- Roberts, I. (2007). *Diachronic Syntax*. Oxford: Oxford University Press.
- Saito, M. (1985). *Some asymmetries in Japanese and their theoretical implications*. Doctoral dissertation, MIT.
- Saito, M. (2007). Notes on East Asian Argument Ellipsis. *Language Research*, 43, 203-227.
- Wakabayashi, S. and Negishi, R. (2003). Asymmetry of Subjects and Objects in Japanese Speakers' L2 English, *Second Language*, 2, 53-73.
- Yamada, K. (2005). *The status of the Overt Pronoun Constraint in grammatical theory and SLA of Japanese*. Doctoral dissertation, University of Essex.
- Yamada, K. (2008). English Natives' Interpretation of pronominals in Japanese: evidence From a Pilot Study, *大阪女学院短期大学紀要*, 37, 1-18.
- Yamada, K. (2009). Acquisition of zero pronouns in discourse by Korean and English learners of L2 Japanese. In M. Bowles et al. (Eds.), *Proceedings of the 10th Generative Approaches to Second Language Acquisition Conference*. (pp. 60-68). Somerville, MA: Cascadilla Proceedings Project.
- Yamada, K. and Miyamoto, Y. (2017). On the interpretation of null arguments in L2 Japanese by European non-pro-drop and pro-drop language speakers. *Journal of European Second Language Association*, 1, 73-89.
- 安藤貞雄・小野隆啓 (1993). 『生成文法用語辞典—チョムスキー理論の最新情報』大修館書店
- 神崎高明 (1991). 『日英代名詞の研究』研究社
- 高橋大厚 (2016). 「項削除」村杉恵子・斎藤衛・宮本陽一・瀧田健介編『日本語文法ハンドブッカー—言語理論と言語獲得の観点から』開拓社 228-264頁

L2日本語における非顕在的な要素の習得研究

山田 一 美

日本語の非顕在的な要素の統語ステイタスは代名詞 *pro* であることが、これまで広く受け入れられてきた (Saito 1985, Hoji 1987, Nakayama 1988, 神崎, 1991等)。そして、生成文法理論を枠組みとする第二言語習得研究においても、その前提のもとに、日本語学習者の非顕在的・顕在的な要素に関する習得について検証がされてきた (Kanno, 1997, 1998; Marsden, 1998; Wakabayashi and Negishi, 2003, Yamada, 2005, 2008, 2009他)。しかしながら、近年、日本語の非顕在的な要素の統語ステイタスは *pro* ではなく項削除であることが主張されている (Oku, 1998; Saito, 2007他)。日本語の非顕在的な要素が *pro* ではないとすれば、これまで第二言語習得研究において *pro* 分析のもとに説明がされてきた日本語学習者の中間言語は、一転して、項削除分析のもとで説明される必要性が生じる。

本稿では、まず、英語を母語とする日本語学習者が、普遍文法の原理として数えられる顕在的代名詞の制約 (Overt Pronoun Constraint = OPC) (Montalbetti, 1984) にアクセス可能かどうかを検証した Kanno (1997) を概観する。続いて、Oku (1998)、Saito (2007) で指摘されている、従来の *pro* 分析では説明が困難な日本語の非顕在的な要素の解釈および項削除分析について紹介する。さらに、項削除分析のもと、日本語学習者による緩やかな同一性解釈の習得について検証した Yamada and Miyamoto (2017) を概観し、Kanno (1997) とは全く異なる考察が得られたことを指摘する。最後に、これまでの中間言語に関する予備実験データから、項削除分析では十分に説明ができない結果が得られていることを報告し、今後のさらなる研究の必要性について言及する。